

# 介護等体験実習 の報告

## 教師による生徒への 関わりについて学んだこと

亀田 拓也

(史学・文化財学科3年)

私は、特別支援学校で2日間実習をさせて頂きました。コロナ禍ということもあり、生徒との接触は少ないながらも、感じたことはたくさんありましたが、2点に絞らせて述べさせていただきます。

1点目は、先生が生徒の様子や身体の調子をよくみているなど感じました。私は、体育の授業を参観させて頂いたのですが、授業の途中で生徒に先生が駆け寄り、「大丈夫？自分がどのくらいできつくなるかわかる？」というやりとりがありました。後ほど先生にお伺いしていくと、その生徒は身体があまり強くないが、頑張ってしまう性格であるため、自分がどのくらいできつくなるかを把握させなければならないということをおっしゃいました。このことから先生が生徒のことをよく見て必要なはたらきかけを行うことで、学校を卒業してもしっかりと自立できるように教育しているのだと感じました。また、クラスにADHDの生徒がいる場合、教室の掲示板を極力少なくしたり、目立たない掲示物を貼っていることに気がつきました。私は、実習前の授業で、ADHDの方は、集中力のコントロールが難しいというのを学んでいました。実際、現場を見て、生徒が集中しやすいように掲示板を工夫していて、これも生徒の支援の一つだと思いました。

2点目は、先生全員が障がいのある生徒に対しての話し方が丁寧で、支援する際は「〇〇してあげる」ではなく、「手伝えることある？」という聞き方が心がけていたことです。障がいがあるからといって常に「してあげる」という目線で接することは決

してしてはいけないと改めて感じました。

この2点から、どのような形態の学校であれ、生徒が主役だということを忘れずに、生徒のことをよく見て対応したり、接したりすることが大切だと学びました。これから実習に行く方は、毎日学びを意識して目標を定めれば様々な発見があると思います。

## 大事なことは知ろうとすること

大平 花歩

(国際言語・文化学科3年)

私が実習体験を行わせていただいた施設は、「就労継続支援B型」多機能型という形態であった。これは主に知的な障がいを持つ成人の方々が、自立した日常生活や社会生活を営むことができるように就労の機会を提供するとともに、生産活動含むその他の活動経験を通じて必要な支援を行う施設だ。活動としては、菓子メーカーのケーキ箱を折ったり、椎茸をパック詰めしたりといった室内で行うものばかりであった。

この数日間の実習を通し、特に「コミュニケーションの意義」を学んだ。この実習を行うにあたり、私はインターネットで知的な障がいを持つ方たちについて情報収集を行った。知的な障がいを持つ方と真正面から接するのはこの時が初めてだったからだ。ある程度の知識を頭に入れて臨んだ実習で一番役に立ったのは、コミュニケーションだった。私は元来コミュニケーションが得意な方ではない。けれども初日から最終日まで自分からコミュニケーションの機会をつくることを意識した。時にはなにを話しているのかが分からない人や、話しかけても返してくれない人もいた。また泣き声が聞こえたり、喧嘩が起きたりした時もあった。そんな時は職員の方にお力添えをいただきながらも、できる限り利用者の方とコミュニケーションを取った。なにを言っているのかが分からなくても聞く姿勢は決して崩さない。待っているのではなく自分から話しかける。そうしていると利用者の方も心を開いてくれ、最終日

には手紙まで書いてくださった方もいた。コミュニケーションはキャッチボールに例えられるが、対話が成り立っていなくてもまずは相手の言葉を受け入れる。なにを伝えたいのかを想像する。今回の実習ではそういった力が一番役に立った。

現在の社会情勢も相まって、対面でのコミュニケーションは回避されることもある。しかし、対面も含めたコミュニケーションの重要性を今回の実習で実感することができた。そのため来年時以降、介護等体験実習に行く後輩たちには、相手の気持ちを受け入れる・なにを伝えたいのかを想像するコミュニケーションを意識して実習に臨んでほしい。

---

## 介護等体験実習を通して学んだこと

持留 峻大

(史学・文化財学科3年)

---

私は、母子生活支援施設で介護等体験実習をさせていただきました。その中で、環境整備や消毒作業、児童の宿題や遊びの支援を行いました。この実習を通して、私は様々なことを感じる事ができたので、そのことについてお話しさせていただきます。

まず私が感じたことは、人と関わることの大切さです。これは、児童との会話の中で感じ取ることができました。実習初日には児童とうまくコミュニケーションをとれない場面がありましたが、日を重ねるにつれて児童も私にだんだんと心を開いてくれて、「先生、今日学校でね」「先生、一緒に遊ぼう」などと積極的に声をかけてくれるようになりました。そして実習最終日には、「先生、また来てね」「また遊んでね、宿題教えてね」ということを言ってくれて、私自身とても感銘を受けました。たった五日の実習でしたが、こういった子供たちのあたたかさから人と関わることの大切さを学ばせていただきました。

また、観察すること、目配りの大切さというものも学びました。遊びの支援の時には、児童同士でケ

ンカや言い合いになるという場面もありました。その時私はどう対応していいかわからず、担当されている職員の方の対応を観察していました。その職員の方の対応は、一人ひとりの性格や、何がしたいのか、どう考えているのかということをしかりと見極め、それに沿ったような対応をされる、というものでした。例えば、話を聞いてほしいような児童はしっかりと話を聞いてあげたり、悪口などを言う子にはなぜそういったことを言っはいけないのかを一緒に考えたりするといったようなことです。そこから私は、一人ひとり観察することや、常に周りを見るという目配りの大切さに気付くことができました。これは教員になった時に、授業や生徒指導という場面で必要不可欠なスキルだと思います。

他にも、環境整備や消毒作業は児童によりよく学習してもらうためのもので、生徒目線に立って物事を考えるということの大切さを学ぶことができました。こういった介護等体験実習の経験を糧に、間近に迫ってきている教員採用試験に向けて一層精進していきたいと思います。

---

## 介護等体験実習での学び

伊藤 千咲

(国際言語・文化学科3年)

---

私が実習を行った施設は、就労が困難な人に働く場を提供するとともに知識及び能力を向上する訓練を行う「就労継続支援B型」と、常に介護を必要とする人に介護を行うとともに創作的活動や生産活動の機会を提供する「生活介護」の二つの事業を行っていました。実習では介助の様子を見学したり、利用者の方々と牛乳パックちぎりやペットボトルの分別をしたりしました。

このような体験を通して学んだことは「特性を理解することの大切さ」です。施設には様々な利用者の方々がいましたが、施設の職員の方は利用者一人一人に合わせて対応をしていました。そして利用者の方々との接し方に悩んだ際は「○○さんはこのよ

うな人だからこうするといひよ」と教えてくださいました。

施設職員の方のように利用者一人一人に合う対応をするには、それぞれの特性をよく理解しておく必要があります。利用者の方々と同様、学校にも様々な生徒がいます。よって生徒と接する際は、実習で学んだ「特性を理解することの大切さ」を忘れずに接していきたいです。

また、実習の中で印象に残った言葉があります。それは「利用者の方が50%しかできなかつたと捉えるのではなく、50%できたことを認める」という言葉です。この言葉を聞いた時、この考えは教師として生徒と関わる上でも大切なことであると感じました。なぜなら「100%できていなかつたとしてもできたことを認める」ことは生徒の自己肯定感を高めることにつながると考えるからです。

教育再生実行会議の提言に「自己肯定感を高め、自らの手で未来を切り拓く子供を育む教育の実現」という言葉があるように、子どもの自己肯定感を高めることは重要なことです。よって生徒と接する際は、一人一人の特性を理解するだけでなく「100%できていなかつたとしてもできたことを認める」という考えを大切にしていきたいです。

実習では上記に挙げた以外にも様々なことを学び、感じました。今回の実習で学んだことを活かし、生徒にとって良い先生となれるようこれからも勉学に励みます。

